



Title	2008年南京市江心洲調査記録
Author(s)	片山, 剛
Citation	近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター. 2009, 4, p. 149-154
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27016
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2008年南京市江心洲調査記録

片山 剛

はじめに

今回の南京出張では、南京市档案馆に有用な文書資料が存在すること、しかし電子複写に制限があるので、資料筆写に時間を割かなくてはならないが、筆写のためのマンパワーが少ないこと等の条件を考慮して、江心洲での実地調査を2008年9月6日(土曜日)の一日のみとした。なお、高齢化が進んでいる点、子女とともに江心洲を離れる古老が多い点から、十分な採訪条件を備えた対象を探しだすことが困難となっていることも、江心洲実地調査を一日に限った一因である。参加者は片山以外に、稲田清一氏(甲南大学文学部教授)、根岸智代氏(大阪大学大学院博士後期課程学生、南京大学留学中)である。

9月3日～5日の南京市档案馆における資料調査で、旧37・38保にまたがる永定洲(37保の上八股と38保の下八股)に関連する資料を比較的多く収集できた。これら資料によると、上八股も下八股も、それぞれ16個の字号に区画されているという。また、2006年の江心洲調査の時に撮った写真(次頁の**写真1**)にも、旧38保の範囲に「头号(頭号)」「八号」の地名が表示されており、この二つの地名は上記16個の字号と関係すると推測される。そこで、旧37・38保在住の古老を採訪することにした。なお、文中の〔 〕【 】は、各々採訪者片山による補足・注釈である。

1. 許泰康氏

採訪①: Ego1 許泰康(男性)。

1929年(巳年)生まれ。解放前から永定洲38保に居住。2008年9月6日午前、許氏の自宅(横埂21号)にて採訪を行う。

◆移住時の状況と家族構成

父の名前は許世宏で、安徽省無為県から江心洲に移住した。Ego1が生まれたのは、父が30歳くらいの時である【よって、Ego1の父は1900年頃の生まれ】。父は1949年に死去し、母は77歳で死去した。兄弟姉妹としては妹が1人いる。

◆解放前の38保の状況

父が1筆27畝を租佃していた。堤防には隣接していない耕地だった。業主の取り分が60%、父が40%の分租制であった。父が租佃していたのは〔38保の〕「十号圩」の土地で、地主は費子卿【38保公佈図等¹では費子清とも書かれている】であった。費子卿は南京の夫子廟に近い許家巷に住んでおり、父は許家巷の費の家まで行って納租した【なお38保公佈図に、Ego1の父、許世宏は登場しない】。

国民党の科長だった朱子建が〔38保の〕「九号圩」の土地320畝全部を所有してい

¹ 江心洲の公佈図をはじめとする地籍図については、大坪慶之・山本一・片山剛・荒武達朗「台湾収集の地形図および地籍図について」、片山剛「江心洲地籍図をどう読むか」(いずれも『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』2, 2007年, 参照。

た。馬路埂の下流、すなわち北側の 38 保には、全部で 16 号の土地があった。38 保の保長は李開国【李開国については、後述参照】、甲長は王学武であった。

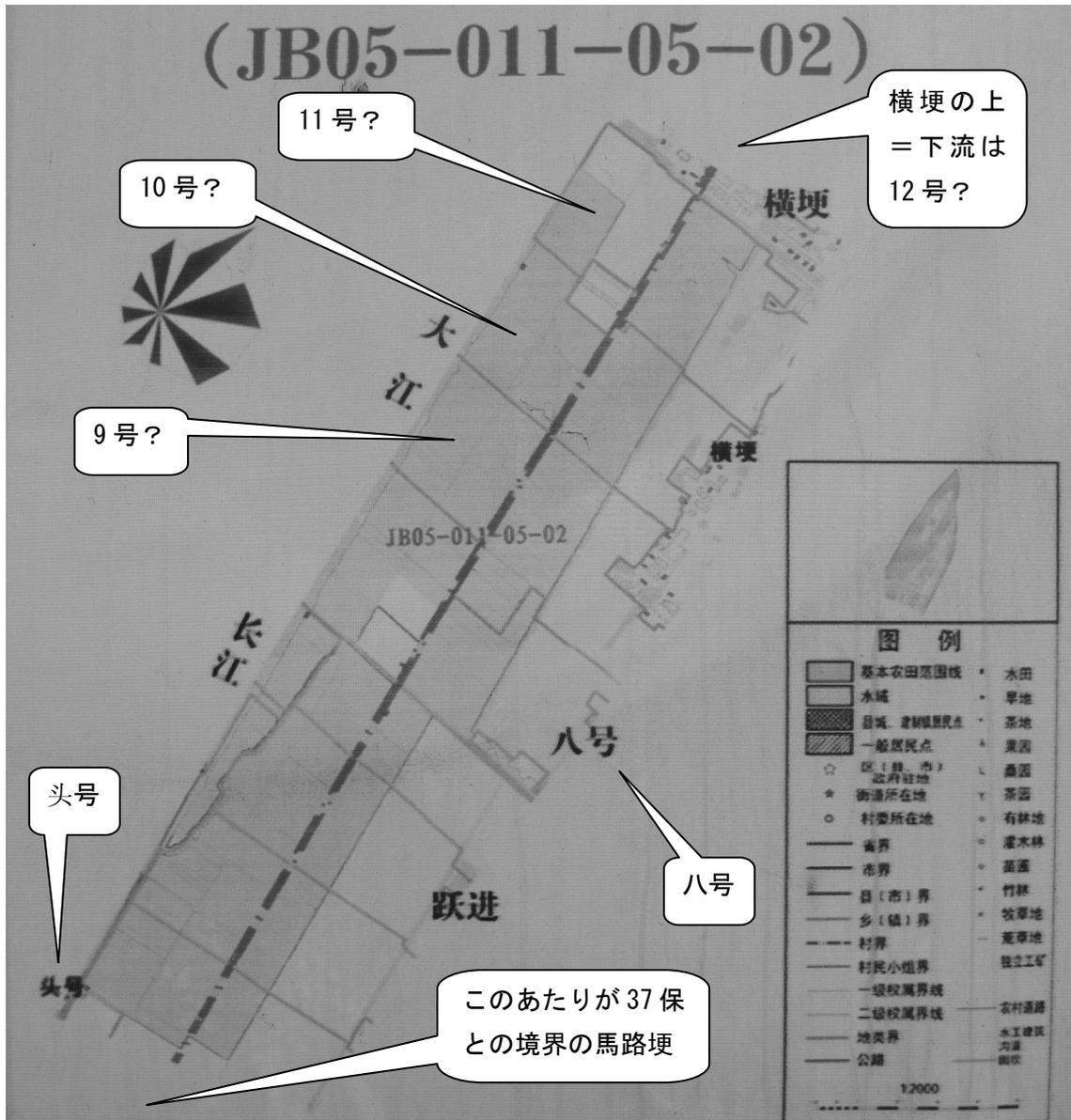


写真1 現在の地名にも継承されている旧 38 保の「头号」と「八号」

「八号」の上方（下流）は、9号、10号、11号と続くと推測される。

（「江心洲街道洲泰村基本农田保护块示意图」2006年12月23日撮影）

解放前、農作物としては小麦・大豆（「黄豆」）・トウモロコシ（「玉米」）を植えていた。解放後、文革の時に水稻を植えたが、78年以降はまったく水稻を植えていない。

解放後は毎年冬に2～3ヶ月（期間は毎年異なる）をかけて、堤防の補修を行っている。解放前、政府は「農民が江心洲を」開発するのを許さなかった。そして政府は「不管農民」だったので、農民は「没有戸口」であった。しかし農民は「随便」にヨシを

刈って売ることができた。ヨシを売の場合は、南京の水西門に行って売った。農民の6割から7割は無為人であった。父は「逃荒」のため無為県を離れて江心洲に移住して来た。ヨシはだいたい家で燃料として消費してしまう（「養家糊口」）。家の収入源は耕作した農作物である。租佃していた1筆27畝の土地の形状は、17m×300mの「長条」であった。ヨシを刈った所が耕地となり、農作物を植えることができる。

解放前、囲董がいた。囲董の人事は政府が決めた。1～11号は周漢臣が「管」していた。周は解放後に銃殺された。

◆土地改革、その他

土地改革時の家族構成は、父・母・Ego1・妻・妹の5人。階級成分は中農。分配は17畝。「業権」「佃権」「永佃権」「田底権」「田面権」という語はこれまでに聞いたことがない。息子が1人、娘が3人いるが、そのうち江心洲に住んでいるのは娘1人（52歳）だけである。



写真2 許泰康氏



写真3 徐荣金氏

2. 徐荣金氏

採訪②：Ego2 徐荣金：

1933年（酉年）、馬路埂の37保で生まれた。2008年9月6日午後、徐氏の自宅（紅光98号）にて採訪を行う。

◆移住状況など

父の名前は徐少彩、生年月日は不明。父は蘇北の宿遷県に住んでいたが、「逃荒」のため江心洲に来た。それはego2の兄が8歳の時のことである。兄はEgo2よりも12歳年長である【よって、兄が1921年生まれとして、1929年頃に江心洲に移住してきたことになる】。兄以外に、Ego2より2歳年下の弟1人がある。Ego2は解放前に耕作を開始した。51年に兵隊になり、「抗美援朝」（朝鮮戦争）に1年従軍した。

◆耕作・租田状況

解放前の37保の保長は劉啓芬で、かれは農民であった。郷長は唐春山であった。なお、理由は不明だが、人は父のことを土匪といていた。解放前、家族で1筆60畝を

耕作していたが、これは租佃したものである。業主は馬士浩（馬士豪）で、馬の取り分が 60%、Ego2 の父が 40%だった【つまり分租制】。馬士浩は女性で太っており、49 年当時で 40～50 歳に見えた。彼女が江心洲の父の家に収租しに来た。租佃していたのは〔37 保の上八股の〕六号の土地である【37 保公佈図の地番 79 について、「旱地、面積 70.4 畝、業権保有者は馬士豪とあり、佃権保有者については「劉啓芬・徐少彩」と、Ego2 の父と保長の劉啓芬の二名が併記されている】。低産の土地で、作物は小麦・大豆（「黄豆」）・トウモロコシ（「玉米」）である。

◆その他、解放前の状況

最初に父一人で江心洲に来て定着地を決め、それから母・兄を呼んだ。一緒に移住した親戚はなし。地主と相談して、父はヨシを伐採して「開荒地」した。Ego2 は、私人が開いている私塾で 2～3 年勉強し、その後 8～9 歳の時に就学（「上学」）した。

◆土地改革

〔張先甲・潘木山について尋ねると、〕張先甲は土地改革の時に「二地主」に分類された。潘木山も土地改革の時に地主に分類された【「二地主」かどうかは未確認】。その息子はまだ健在である。ほかに杜姓の大地主がいた。

解放と土地改革の間に、わが家は 20 畝の土地を購入した。以前租佃していた 60 畝は土地改革前に業主に還した。父の土地改革の時の階級成分は中農。家族は 5 人。土地改革の分配は、家族全部で 27 畝。そのうちの 20 畝は上記の購入したものである。

物心がついた時【1940 年代になろう】には、37 保にはもう荒地はなかったが、38 保には荒地があった。江心洲の上流にある関帝廟には行ったことがある。

※ 徐氏から、「“里紅外白” 的保長李開国」「1928 年；江心洲就有地下党」という江心洲に關係する 2 件の記事を掲載する『老南京』（2006 年 5 月 1? 日。日付の最後のアラビア数字は判読不能）というタブロイド版新聞のコピーを頂戴する。新四軍の影響もあり、李開国など、江心洲の郷長・保長・甲長には“里紅外白”の人物が多かったと報道している。徐氏は、解放前のことを話すには自分は若すぎるので、適当な探訪対象として、次の陶引倫氏を紹介して下さった。

3. 陶引倫氏

探訪③：Ego3 陶引倫

87 歳。成年生まれ。成年が西暦何年かを確認しようとする、身分証を出して見せていただいた。それによれば、1922 年 2 月 11 日生まれとある。1922 年はまさに成年。また、住所は身分証に「建業区紅光 27-1 号 1 隊」とある。2008 年 9 月 6 日午後、陶氏の自宅にて探訪を行う。

◆移住と耕作開始

安徽省無為県生まれ。「逃荒」のため 11 歳の時【1933 年頃】に無為県を離れ、叔父（ego3 より 30 歳ほど年長で、名は陶根錦【37 保の地籍公佈図に「陶根景」という人

名が登場する。それによると、地番 33・34・37・38・73 の 4 筆の早地、計 28 余畝を所有し、地番 66 の早地 10 畝余を馬文藻から租田している。音通で同一人物であろう) に連れられて江心洲に来た。叔父の家族構成は、叔父・妻・子供 2 人で、ego3 を含めて 5 人で江心洲に来た。江心洲に来た当初は、ヨシばかりが繁茂していた。叔父は無為県でも農民で、江心洲に来てから開墾に従事した(「開荒」)。

Ego3 は就学経験なし(「没有上学」)。18 歳から耕作を始め、30 畝を耕作した。この土地は租佃で、業主は馬士浩。南京に住む女性で、太っていた。馬本人が江心洲に収租しに来た。収穫の 60% が業主の取り分で、40% が佃農の取り分だった【すなわち分租制】。



写真 4 陶引倫氏



写真 5 南京市街と結ぶ橋梁の工事

◆永定洲について

永定洲は「上八股」と「下八股」に分かれていた。全部で 16 号あった【この 16 号は、永定洲全体についてのことか、上八股についてのことか、あるいは下八股についてのことかは未確認】。永定洲のうち、上八股の範囲は、下流は、38 保との境の馬路埂から、上流は花園までである。

馬士浩(馬士豪)は、あちこちに土地を所有しており、上下八股以外に、旗桿洲にも土地を所有していた。

下八股のうち、三号・六号・九号にはまだアシ・ヨシが生えており、荒地であった。十二号・十三号・十四号にもアシ・ヨシが生えていた。

◆土地改革

階級成分は、本人は貧農、叔父(17 畝を租佃していた陶根錦)は中農、もう一人の叔父(陶根錦の兄の陶根発。30 畝を租佃)は富農であった【陶根発も 37 保公佈図に登場する。それによると、地番 31・32・74 の 3 筆の早地、計 22 余畝を所有し、地番 66 の早地 10 畝余を馬文藻から租田している】。

最後に「佃権」の存在について尋ねたが、「佃権」という語そのものを聞いたことがなく、

49年以前の江心洲における佃権の存在にかんする明快な回答は得られなかった。なお“転租する権利”のような回答もあったが、あまり明確な説明を得ることはできなかった。

おわりに

「はじめに」で述べたように、解放前の江心洲の状況を採訪する対象として、十分な条件を備えた古老は年々減少している。今回、2006年と2007年に採訪した万成功・趙玉龍・凌明海・王立栄・朱遠財の諸氏に、ニューズレターを差しあげるべく再訪したが（王立栄・朱遠財の2氏には直接お会いできなかった）、高齢化の進展を改めて感じた次第である。加えて、江心洲と南京市街地とを結ぶ橋梁の工事が着工されている（写真5）。竣工すれば、江心洲が南京市のベッドタウンとなり、景観も大きく変化しよう。解放前夜、あるいは土地改革を対象とする実地調査は、そろそろ限界に近づいているようである。